

ジョージア (グルジア) 便り その34

『大きな歓声が聞こえた。なんという快感だろう!』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ニーナ・アナニアシヴィリを囲んで。
後列右から2人目が筆者

「ブルーバード」の一つ目のデュエットが終わり、指揮者とアイコンタクトをとって、僕は自分のソロの踊りの位置に向かった。舞台上は自分以外の時の流れが止まったかのように不気味なほどの静寂が広がっていた。心臓の鼓動、歩くたびに軋む床の音が鮮明に聞こえる。普段は意識仕切れない爪先指先の感覚が確かにあった。それはいつにも増して緊張していたせいか、日本の観客の咳音一つしない素晴らしいマナーの良さのためなのかわからないが、とにかく僕の五感に研ぎ澄まされていた。緊張感に飲み込まれるのではなく、緊張感を上手く利用して、僕は幽体離脱したかのように自分を客観視できていたようだ。

マエストロがタクトを振り下ろし、踊りが始まると今朝までの不調が嘘のようになんか急に体が軽くなった。時差ボケで朝5時ま

で寝つけなかったことも、飛行機の疲れも僕の体は忘れてしまった。一つ一つのポーズを楽しみながら踊り、指揮者の醸し出す音楽に不安一つなく体を委ねる。幸福を感じながら最後のポーズを決めると再び僕の周りの時間は止まった。今自分が感じていたことがただの自己満足で、観客は無反応だったのかと一瞬不安に陥ったが、すぐさま大きな歓声が聞こえた。僕一人に向けてられた賛美、故郷の応援、僕が夢にまで見た場所での歓声である。

トビリシでも、サンクトペテルブルグでもポリシヨイ劇場でもこれほどまでに緊張はしなかったし、逆に言えばこれほどの充実感を持って舞台に立てたことはなかった。それはここが東京文化会館であるということ。僕が7歳の時に初めてバレエを見て以来足繁く通った劇場で、僕にとっての聖地、憧れの場所であるから。そして当代を代表する憧れのダンサーと共に今日の舞台を引っ張っているという誇り。完璧な音楽を紡ぎ出す指揮者とオーケストラ、一言えは十動く裏方など、この場所に集ったもの同士のマリアーージュに

よって、踊っていて真の快感を得られた舞台があったのだ。

そう思うのは僕だけではないようで、ジョージアの連中もいつもより輝いている者が多かった。彼らに至っては、買い物やカラオケなど日本を満喫しながら、普段よりも力を発揮しているのだからその凶太さは見倣いたいものがある。僕などは日本の厳しい観客と期待している家族や友人、バレエ関係者のプレッシャーを受け、ここ最近随分と神経質になつていたのでから。

とにかく今回の日本ツアーは僕に大きな自信を与えてくれた。応援してくれている人が多々いるということがこれからこの励みになる。故郷の期待を裏切るわけにはいかない。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

「ニーナ・アナニアシヴィリの軌跡
最後のクラシックガラ」
東京文化会館3月16日〜20日
の公演に於いて

